

素寂本『貫之集』書き入れの検討

はじめに

平成十六年二月、冷泉家時雨亭叢書に、素寂本『貫之集』^①が紹介された。上巻（巻一から巻四の屏風歌）のみが伝わる欠本であり、これは『貫之集』歌仙家集本巻一から巻四の屏風歌の部分に相当する。本文は漢字交じりの片仮名の書写、鎌倉時代の僧侶である素寂の筆になる。素寂は『源氏物語』の注釈書、『紫明抄』の作者として知られる。

この素寂本は、既に久保木哲夫氏^②、田中登氏^③によって、『貫之集』第一類本の中で、歌仙家集本系統でも西本願寺本系統でも承空本系統でもなく、新たな一系統として位置付けられている。『貫之集』伝本中、本文異同には採るべき点が多く、まことに注目すべき存在である。その後、拙稿では素寂本を視野に

入れて『貫之集』を読むと、従来とは異なった解釈が可能になり、さらに歌仙家集本の誤りを訂正出来るということが確認出来た。^④このように、本文、解釈ともに注目すべき素寂本であるが、その本文には少なからず書き入れが施され、巻末に記されている奥書は次のごとくである。

文永十一年六月七日書之

靈山本也

素寂記

同九月八日一校了

此本雖為一帖私令分為上下

而已

文永十一年（一二七四）六月七日に、素寂が「靈山本」^⑤を書写し、さらに、同年九月八日に一校していることがわかる。本稿

北井 佑実子

は『貫之集』伝本中、どの系統の本文によって素寂本に書き入れが施されたのか、ということを確認する。さらに、書き入れを精査することにより、『貫之集』本文研究において、従来とは異なる新たな一面を見出すことができるのかを検討する。

『貫之集』第一類本

『貫之集』伝本中、素寂本は第一類本に属する。第一類本は、『貫之集』全体の構成によって系統が分かれている。本稿では、
(1) 歌仙家集本 (3) 西本願寺本 (4) 承空本をそれぞれ取り上げ、素寂本の書き入れとの異同をみていく。⁶⁾

第一類 (1) 歌仙家集本 (正保四年刊 九卷八八九首) 系

- ・陽明文庫本 (近・サ・68 九卷八九二首)
- ・東海大学桃園文庫本 (九卷八九二首)
- ・村雲切 (巻五の一部と巻八及び諸家蔵

七十七葉二五〇首)

(2) 素寂本 (巻一〜巻四の五四五首) 系

(3) 西本願寺本 (二〇巻七二七首) 系

(4) 資経本 (巻六巻七の三一六首) 系

- ・承空本 (七卷九二二首)

巻四の異同

『貫之集』第一類本は、西本願寺本が巻四の歌をすべて欠いている。従って、西本願寺本を欠く巻四から異同をみていく。⁷⁾

おみなへしあるところにかりす

も、くさのはなはみゆれともをみなへしさけるなかにをかり

くらしむ (三八〇)

「あれとも」を見せ消ちで訂正し、「みゆれと」と書き入れがある。ここは、歌仙家集本・承空本ともに「みゆれと」となっていて、素寂本の書き入れは、歌仙家集本・承空本と一致する。

十一月りむしのまつり

あしひき^の○やま井のいろはゆふたすきかけたる^{きぬ}□□のかた
にさりける (三九九)⁸⁾

初句「あしひき」の後に補入符が記され、「の」と書き入れが施されている。ここは、歌仙家集本・承空本ともに「あしひきの」となっている。さらに、第四句「かけたる□□」は、見せ消ちで訂正し、「きぬ」と書き入れがある。ここも同様、歌仙家集本・承空本ともに「かけたるきぬの」となっている。素寂本の書き入れは、歌仙家集本・承空本と一致する。同様の例は七例確認

できており、巻四の場合、素寂本の書き入れは、歌仙家集本・承空本と一致している。

歌仙家集本と一致

次に、西本願寺本を含む巻一から巻三を対象として、異同をみていく。まず、歌仙家集本と一致する例をあげる。

人のいゑにこうはいのものもとに女ともをりてみる

ゆきとのみあやまたれしをむめのはなくれなるさへかよひ

けるかな (三五六)

「あやまたれしを」には「つ、」と書き入れがある。歌仙家集本では「あやまたれつ、」、それに対して西本願寺本・承空本では「あやまたれしを」となっている。素寂本の書き入れは、歌仙家集本の本文と一致する。このような例は三五六番歌のみである。素寂本の書き入れが、歌仙家集本の本文と一致し、他本と対立するのは、わずか一例となる。それに対して、歌仙家集本の書き入れと一致している例が幾つかみられる。

ころもうつ

よを
かせさむみわか、りころもうつときそはきのしたはも
うつろひにけり
いろまさりける (一八)

第五句をみていく。「いろまさりける」は、「うつろひにけり」と書き入れがある。ここは、歌仙家集本では「色まさりける」、西本願寺本・承空本では「いろまさりける」となっている。素寂本の書き入れ「うつろひにけり」は、歌仙家集本の書き入れに近い。なお、初句「かせさむみ」第二句・第三句「わか、りころもうつときそ」の書き入れについては、後述する。同じ例をあと二例みていく。

女とも山てらにまうてたる

おもふ事ありてこそゆけはるかすみみちさまたけにたち

わたるらむ (四五)

「たちわたるらむ」は、本文の左に「なかくしそ」と書き入れが施されている。歌仙家集本では「立わたるかな」、西本願寺本「たちかくす覧」、承空本「たちかくすらん」となっている。素寂本の書き入れは、歌仙家集本の書き入れと一致している。なお、『拾遺和歌集』に同じ歌がみえる、¹⁰⁾

延喜十五年齋院屏風に、霞をわけて山寺にいる人あり

きのつらゆき

思ふ事ありてこそゆけはるかすみ道さまたけにたちなかく

しそ (一〇一七)

傍線部「たちなかくしそ」は素寂本の書き入れと一致する。

四月をほうわのまつりのつかひ

拾しいつれをかしるへしともはわむみわの山ありとしあるは拾みえとみゆるはすき

にそありける（一四五）

「みえとみゆるは」に施された書き入れは「ありとしあるは拾」となっていて、さらに集付が施されている。歌仙家集本では「見えとみゆるは」、西本願寺本・承空本は「みえとみゆるは」となっている。この例においても、素寂本の書き入れは歌仙家集本の書き入れと一致している。なお、『拾遺和歌集』をみてみると、

延喜御時中宮屏風に

つらゆき

いつれをかしるしとおもはむみわの山ありとしあるはすき
にそありける（一二六六）

傍線部「有りとしあるは」は、素寂本の書き入れと一致する。四五番歌・一四五番歌の例においては、勅撰集の本文と校合した可能性が考えられよう。

西本願寺本と一致

次に、素寂本の書き入れが西本願寺本と一致する例をみていく。

とし月のかはるもしらてわかやとのときはやまのまつのいろを
こそみれ（二二二）

「ときはのまつ」には、「やま」と書き入れがある。ここは歌仙家集本「ときはの松」、西本願寺本「常葉の山」、承空本「ときはのまつ」となっていて、素寂本の書き入れ「やま」という語を有しているのは西本願寺本である。さらに同じ例として、

いとをのみたえすよりいたすあをはやきをはとしのをなかきし
るしとそ思（二六九）

「思」には、「みる」と書き入れがある。西本願寺本は「みる」、歌仙家集本では「思」、承空本では「おもふ」となっていて、素寂本の書き入れは西本願寺本と一致する。このような例はあと二例確認できている。なお、第五句「しるし」に施された書き入れ「ため」については後述する。

承空本と一致

続いて、素寂本の書き入れが承空本と一致する例をみていく。

やよひのつこもりいたちにさくらのはなちる

かせふけはかたもさためすちるはなをいつこへえかへるはる

とかはみむ（一二八）

「ついたち」を見せ消ちで訂正、「こもり」と書き入れが施されている。詞書をあげると、歌仙家集本は「三月花ちる」、西本願寺本は「桜花ちる」、承空本は「やよひのつこもりにはなちる」となっている。素寂本の書き入れと一致する「つこもり」という語を有しているのは承空本である。

かみへのやしろ

かけとのみたのむかひとてつゆしもにいろかはりせぬかみへ

のやしろか（一七〇）

詞書「かへのやしろ」には、「み」と書き入れがある。ここでも詞書をあげると、歌仙家集本「かへのやしろ」、西本願寺本「かへの社」、承空本「かみのやしろ」となっている。さらに、第五句の「かへのやしろか」も同様に、「み」と書き入れがあり、歌仙家集本・西本願寺本では「かへのやしろか」、承空本では「かみのやしろも」となっている。素寂本の書き入れと一致する「か

み」という語を有しているのは承空本である。同様の例はあと一例確認できる。

歌仙家集本・西本願寺本と一致

次に、素寂本の書き入れが歌仙家集本・西本願寺本と一致する例をみていく。

うつろはぬときはのやまにすふるイむときはしくれのあめそか

ひなかりける（五四）

「すむときは」には「ふるイ」と書き入れがある。これまでみてきた例とは異なり、「イ」と異本注記を伴うため、他本で校合したことが明らかとなる例である。歌仙家集本・西本願寺本では「ふるときは」、承空本では「いるときは」となっていて、素寂本の書き入れと一致するのは、歌仙家集本・西本願寺本である。さらにもう一例、

こまむかへ

みやこにてなつてひ本をけはこかさへみはらみつのみまきのこま

にやあるらむ（二九八）

「みつのみまきの」は、本文の左に「へみ」と書き入れが施されている。歌仙家集本・西本願寺本「へみのみまきの」、承空

本「みつのみまきの」となっている。素寂本の書き入れは歌仙家集本・西本願寺本と一致する。このような例は、この二例の他に見出せていない。

歌仙家集本（書き入れ）・承空本と一致

続いて、素寂本の書き入れが歌仙家集本の書き入れ・承空本と一致する例をみていく。

七月七日

拾たなはたにぬきてかしつるからころもいと、なみたにくち
やぬるイやしぬらむ（一二）

「くちやしぬらむ」には、「そてやぬるイ」と書き入れが施されている。「イ」と異本注記を伴うため、他本で校合したことが明らかとなる。歌仙家集本「袖やくちぬるらん」、西本願寺本「そてぬれ南」、承空本「そてやぬるらむ」となっている。素寂本の書き入れは、歌仙家集本の書き入れ・承空本と一致する。同様の例は、他に見出せていない。なお、『拾遺和歌集』に同じ歌がみえる、

延喜御時月次御屏風に

つらゆき

たなはたにぬきてかしつる唐衣いとと涙に袖やぬるらん

（一四九）

傍線部「ぬるらん」は、素寂本の書き入れと一致する。勅撰集の本文で校合した可能性が考えられよう。

西本願寺本・承空本と一致

次は、素寂本の書き入れが西本願寺本・承空本と一致する例をみていく。

かりのなくをきけるところ

あさきりはたちわたれかくせともとふかりのこゑはそらにもかく
れさりけり（二四）

「たちかくせ」は、「わたれ」と書き入れが施されている。歌仙家集本では「立きたれかくせイ」、西本願寺本・承空本では「たちわたれ」となっていて、素寂本の書き入れは西本願寺本・承空本と一致する。

まつかさき

たなひかぬときこそなけれあままきなまきまつかさきよりみゆるしらくも（一六七）

「あまもなき」には「まき」と書き入れが施されている。歌仙家集本「あまもなき」、西本願寺本「秋もなき」、承空本「あきの

なき」となっている。素寂本の書き入れと一致する「あき」という語を有しているのは、西本願寺本・承空本である。

さ、のはのさえつるなへにあしひきのやまにはゆきそふり
しみにける(二二六)

「ふりしみにける」には「つ」と書き入れがある。歌仙家集本「ふりまさりける」、西本願寺本・承空本「ふりつみにける」となっていて、素寂本の書き入れは、西本願寺本・承空本と一致する。同様の例は、あと二例確認できる。

歌仙家集本・西本願寺本・承空本と一致

素寂本の書き入れが、歌仙家集本・西本願寺本・承空本と一致する例をみていく。

やまかせにかをたつねてやむめのはなにはへるさとに
うくひすのなく(三二一)
いゑるそめけむ

「うくひすのなく」は、本文の左に「いゑるそめけむ」と書き入れが施されている。歌仙家集本「家るそめけん」、西本願寺本「いへるそめけむ」、承空本「いゑるそめけん」となっていて、素寂本の書き入れは、歌仙家集本・西本願寺本・承空本と一致する。

たひんかえるかりとあり

ともくにおもひきつとかへりにけれとかりかねはをなしさとへもかへ
らざりけり(二一四)

「かへりにけれと」は、「おもひきつ」と書き入れがある。歌仙家集本では「思ひきつれと」、西本願寺本・承空本では「おもひきつれと」となっていて、素寂本の書き入れは歌仙家集本・西本願寺本・承空本と一致する。

おほそらしあたにみえねはもみちはもかはるときなくては
すへらなり(二九三)
つきかけ

「もみちはも」には、「つきかけ」と書き入れがある。歌仙家集本では「月影の」、西本願寺本では「つきかけも」、承空本では「月かけも」となっていて、素寂本の書き入れは歌仙家集本・西本願寺本・承空本と一致する。同様の例は、二十数例ほど確認できている。ここは、素寂本を除く『貫之集』諸本間で、本文異同がみられない箇所となる。

『貫之集』本文と対立

最後に、素寂本の書き入れが『貫之集』の本文と対立する例を確認する。対象は、巻一から巻四とする。

はなす、きはにはをけともはつしものいろは
いづれとわきそかねつるイ
みえずそきえぬへらなる (八三)

「みえずそきえぬへらなる」には「いづれとわきそかねつるイ」と書き入れがある。「イ」と記されていることから、他本による校合であることが明らかとなる。ここは、歌仙家集本「みえずそ消ぬへらなる」、西本願寺本・承空本「みえずそきえぬへらなる」となっていて、素寂本の書き入れと対立する。第四句・第五句は、素寂本の書き入れを反映させると「いろはいづれとわきそかねつる」となる。

はるかすみたぢよらねはやみよしの、やまにいまさへゆき
のふるらむ (二〇一)

「やまにいまさへ」に「ともいはず」と書き入れがある。歌仙家集本では「山に今さへ」、西本願寺本・承空本では「山にいまさへ」となっていて、素寂本の書き入れと対立する。素寂本の書き入れを反映させると、第四句は「やまともいはず」となる。

をほうわのまつりに人まうてたる所
いにしへのことならすしてみわのやまこゆるしるしはすき
にそありける (二二六)

「ならすして」には「とも」と書き入れがある。ここは、歌仙

家集本・西本願寺本・承空本「ならすして」となっていて、素寂本の書き入れと対立する。「イ本」とあるので、他本による校合であることが明らかである。素寂本の書き入れを反映させると、第二句は「ことならずとも」となる。

いとをのみたえすよりいたすあをやきをとしのをなかきし
るしとそ思 (二六九)

先に、西本願寺本と一致する箇所であげた例であるが、第五句「しるし」について述べる。「しるし」には「ため」と書き入れがある。歌仙家集本・西本願寺本・承空本ともに「しるし」となっていて、素寂本の書き入れと対立する。素寂本の書き入れを反映させると、第五句は「ためしとそみる」となる。

たひ人のはやしほとりにやすみてほと、きすきける
ほと、きすきつ、こたかくなくこゑはちよのさつきのしる
へなりけり (三二〇)

「こたかく」に「すゑに」と書き入れがある。ここも同様、歌仙家集本・西本願寺本・承空本ともに「こたかく」となっていて、素寂本の書き入れと対立する。素寂本の書き入れを反映させると、第二句は「きつ、こすゑに」となる。

ちとせをしと、むへけれとしらたまをぬけるとみゆるきく
きく

のしらつゆ（四〇九）^①

「と、む」に「をし」と書き入れがある。ここは、歌仙家集本・承空本ともに「と、む」となっていて、素寂本の書き入れと対立する。素寂本の書き入れを反映させると、第二句は「をしむへけれど」となるう。

ここにあげた六例は、素寂本の書き入れが『貫之集』のどの諸本とも対立している例である。同様の例は、他に二十例ほど確認できる。素寂本の書き入れを反映させた本文は、従来の『貫之集』では確認することができない、新たな本文ということになるのではなからうか。つまり、素寂本の書き入れによって、従来では確認することができなかった『貫之集』の本文を見出すことが可能となるのではないだろうか。

次にあげるのは、同じく素寂本の書き入れが『貫之集』本文と対立する例であるが、勅撰集の本文と校合した可能性が考えられるものである。

ころもうつ

よをころもなりかねなくなへに古今□□□□
かせさむみわか、りころもうつときそはきのしたはも
うつろひにけり
いろまさりける（一八）

先に、歌仙家集本と一致する箇所であげた例であるが、初句・第二句・第三句について述べる。「かせさむみ」は「よを」と

書き入れがある。ここは歌仙家集本・西本願寺本「風さむみ」、承空本「かせさむみ」となっていて、素寂本の書き入れとは対立する。次に「わか、りころもうつときそ」、ここは「ころもなりかねなくなへに古今□□□□」と書き入れがある。歌仙家集本「わか、り衣うつ時そ」、西本願寺本「わか、らころもうつときそ」、承空本「わかころもうつときそ」となっていて、やはり素寂本の書き入れとは対立する。『古今和歌集』をみてみると、

題しらず

よみ人しらず

夜をさむみ衣かりかねなくなへに萩のしたはもうつろひに
けり（二二一）

傍線部「夜を」「衣かりかねなくなへに」ともに、素寂本の書き入れと一致する。

三月

ときはなるうつろはぬまつのなたてにあやなくもかとれるふちのさき
統古でちるかな（九九）

「うつろはぬ」は、「ときはなる」と書き入れが施されている。この例においても同様、歌仙家集本・西本願寺本・承空本ともに「うつろはぬ」となっていて、素寂本の書き入れと対立する。集付が施されている『続古今和歌集』では、

題不知

貫之

ときはなるまつのなたてにあやなくもかかれるふちのさき
てちるかな（一二二）

となつていて、傍線部「ときはなる」は、素寂本の書き入れと一致する。一八番歌・九九番歌の例は、素寂本の書き入れが『貫之集』本文と一致していない。しかし、書き入れに「古今」とあること、集付が記されていることから、勅撰集の本文で校合した可能性があると見えよう。

おわりに

素寂本の書き入れは、歌仙歌集本・西本願寺本・承空本それぞれの本文と一致している。さらに、歌仙歌集本・西本願寺本・承空本すべての本文と一致している例もみられる。つまり、現存している『貫之集』伝本のいずれかと、完全に一致しているものは見出せない。従つて、素寂本の書き入れは、『貫之集』伝本のうち、複数の諸本で校合したと考えられよう。加えて、勅撰集と校合した例もみられる。素寂本は、奥書に「一校了」とあることから、他本と校合したことは明らかであるが、「イ」といった異本注記や、「古今」といった勅撰集との校合を記し

ていないものが大半である。書き入れは、もと親本（奥書でいうところの「靈山本」）に記されていたものもあろう。

『貫之集』の本文と一致しない例については、勅撰集との校合箇所を除き、『貫之集』における新たな本文を見出すことができたと考えてよからう。この例において、陽明文庫本・桃園文庫本・村雲切（重複する箇所）の本文は、すべて歌仙家集本と一致していることを付け加えておきたい。

本稿で述べてきた素寂本の書き入れの検討は、『貫之集』本文研究において基礎的な作業と言えよう。今後、どの本文によって『貫之集』を読むのかという問題を考えるにあたって、細かな校訂作業も重要とならう。その際、素寂本の書き入れによって今回確認できた新たな本文は、少なくとも有効であると言えるのではなからうか。

〔注〕

（1） 冷泉家時雨亭叢書第七十二卷『素寂本私家集 西山本私家集』（朝日新聞社 平成十六年）。解題は、久保木哲夫氏。

（2） 注（1）の久保木氏の解題。

（3） 田中登氏「素寂本貫之集の意義」（『関西大学文学論集』第五十四巻 第一号 平成十六年）。

(4) 拙稿『貫之集』巻四の解釈―素寂本を手がかりに―(『国文学』第九十一号 関西大学 平成十九年)。同『貫之集』解釈上の問題点―素寂本を手がかりに―(『国文学』第九十二号 関西大学 平成二十年)。

(5) 「靈山本」については、福田秀一氏『中世和歌史の研究』(角川書店 昭和四十七年) に詳しい。

(6) 使用テキスト。素寂本は注(一)、歌仙家集本は平田喜信氏・新藤協三氏・藤田洋治氏・加藤幸一氏『合本三十六人集』(三弥井書店 平成十五年)、西本願寺本は久曾神昇氏『西本願寺本三十六人集精成』(風間書房 昭和四十一年)、承空本は冷泉家時雨亭叢書第六十九巻『承空本私家集上』(朝日新聞社 平成十四年)。なお、書き入れは一首に数箇所施されている場合もあるが、異同を分類するにあたって必要な箇所について言及していることをお断りしておく。

(7) 『貫之集』本文は素寂本で示し、片仮名表記は平仮名表記に改めた。歌番号は歌仙家集本を底本とする『新編私家集大成CD-ROM版』(エムワイ企画 平成二十年) による。

(8) 「」は判読不明箇所である。「かた」と読めるか。

(9) 書き入れ「」は判読不明箇所である。「詠人不知」と読めるか。

(10) 『拾遺和歌集』の本文は『新編国歌大観』本による。以下、勅撰集の本文は同様。

(11) 四〇九番歌は、巻四ゆえ西本願寺本をのぞく。

(きたい ゆみこ／本学非常勤講師)